

教職課程履修生（英語科）の模擬授業後の省察

人間社会学科 遠藤雪枝

1 はじめに

近年、教師教育において省察の重要性が認識されており、英語教育の分野においても省察への関心が高まっている。省察とは、広辞苑第六版には、「自分自身を省みて考えめぐらすこと」とあるが、英語学習者にとっての省察とは、自分の英語学習を振り返って、今後のためにふさわしい結論を引き出す能力であると言い換えることができるだろう。省察の研究対象は学習者や現職教員であることが多く、教職課程履修生の省察に関する研究は十分であるとは言えない。Urzua and Vasquez¹⁾は、「経験の少ない教職課程履修生には、計画を述べたり、結果を予測したり、将来の実践について省察する機会を与える必要がある」と述べている。実際にヨーロッパでは、教職課程履修生の省察力を養うために役立つツールとしてポートフォリオが開発されている。そこで筆者は、担当している授業において、知識伝達型の授業でなく省察を促す授業を行いたいと考え、履修生による模擬授業後の省察を重視した。本稿では、教職課程履修生が模擬授業後に提出した省察に関する自由記述文に対し、計量テキスト分析を行い、履修生が省察している内容を考察する。

2 英語教員に求められる力

英語教員には、どのような資質能力が求められるのだろうか。求められている資質能力とは、能力試験で測れる英語力と、英語教授に関する知識と教養であろう。能力試験で測れる英語力に関しては、文部科学省から発表された「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画（2003）」の中で、ある程度明確な基準が示されている。その中には「概ね全ての英語教員が、英語を使用する活動を積み重ねながらコミュニケーション能力の育成を図る授業を行うことのできる英語力（英検準1級、TOEFL（PBT）550点（IBT換算で80点）、TOEIC730点程度以上）と授業力を備える」と記載されている。英語力に関しては具体的な数値が提示されたが、授業力に関しては具体的な基準は明示されなかった。しかし、その後英語教育の方向性を示した公表内容には、調査項目として、「（中学校・高等学校）生徒の英語力、生徒の英語による言語活動の状況、パフォーマンステストの実施状況、「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の設定等の状況、英語担当教師の英語使用状況、英語担当教師の英語力、ALT等の活用状況、ICT機器の活用状況、小中連携等」が挙げられている。また、「今後の英語教育の改善・充実方策について報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～（2014）」の「教員養成と研修」では、「中・高等学校の教職課程では、英語力・英語指導を強化するという観点から改善・見直しが必要である。大学においては、「教科に関

する科目」を充実する必要がある、特に、英語の構造と機能を理解し、コミュニケーションを行うため、英語音声学・第二言語習得理論を含めた英語学、4技能を統合的に指導する英語コミュニケーションの科目が充実されることが期待される。「教職に関する科目」では、発表・討論・交渉等の言語活動の充実に対応し、模擬授業や教材研究等を充実することが求められる。また、在学中に、海外での留学を通じて、英語力・指導力を高めるとともに、「異文化理解・異文化コミュニケーションへの認識を深めることも重要である」とある。つまり、英語科の教職課程履修生は、広範囲にわたる授業力も求められており、そのためには、日ごろから省察力を身に付ける必要があるのである。

英語科の教職課程履修生が求められる具体的な授業力に関しては、大学英語教育学会の教育問題研究会が開発した「J-POSTL (Japan Portfolio for Student Teachers of Languages: 言語教育履修生のためのポートフォリオ)」を活用するとよいかもしれない。J-POSTLは、EPOSTL (European Portfolio for Student Teachers of Languages: 言語教育履修生のためのヨーロッパ・ポートフォリオ) を日本の教育現場に合うように翻案化したものであり、言語教員の授業力を可視化するために、7分野100項目のCan-do記述文によるチェック・リストが収録されている。これらのチェック・リストは、教職課程履修生が自分の授業力を確認するために、省察用ツールとして活用することができる。つまり、これらのチェック・リストをチェックするたびに、自分ができることとできないことが明確になり、今後の課題が見えてきて、次第に適切な自己評価もできるようになるだろう。

また、文部科学省は、英語教員の資質向上を目指すために、2017年に教育職員免許法と教育職員免許施行規則を改正し、新たに表1のような内容を加えた。これは、今までの免許制度が、学校現場の変化に対応できていないこと、また、大学の教職課程の指導内容が学術研究的な傾向にあることを是正するためである。これにより、英語科教員の備えるべき授業力が明確に規定されたと言ってもよいだろう。全体目標から到達目標に向かうごとに、次第に具体的に提示されている。「到達目標」では、教職課程履修生が到達すべき目標がCan-doリストとして示されている。

全体目標	・教科における教育目標等について理解し、学習指導要領の内容と背景となる学問とを関連させて理解を深めるとともに、授業設計を行う方法を身に付ける。
一般目標	・具体的な授業場面を想定した授業設計を行う方法を身に付ける。
到達目標	・学習指導案の構成を理解し、具体的な授業を想定した授業計画と学習指導案を作成できる。 ・模擬授業の実施とその振り返りを通して、授業改善の視点を身に付けている。 (イタリック体は筆者による。)

表1 免許法改正のイメージ (文部科学省2018、2019から、小泉仁作成)²⁾

3 振り返る（省察する）力

3.1 PISA³⁾のキー・コンペテンシーの枠組みの中にあるreflectiveness（省察）

PISA (Programme for International Student Assessment) とはOECD (経済協力開発機構) が実施している国際的な学力調査のことで、日本語では「学習到達度調査」と言う。PISAの学力観には、個別の国の文化や伝統に左右されない「標準学力」があり、「キー・コンペテンシー（主要な学力）」と呼ばれている。

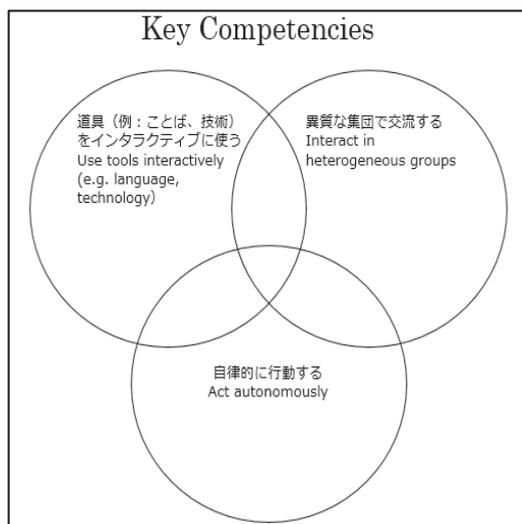


図1 キー・コンペテンシー (OECD/PISA,2003)

このキー・コンペテンシーの枠組みの中に、reflectiveness（省察）という理念があることに注目したい。ここで言うreflectivenessはreflective thought and actionと言い換えることができるだろう。そして、このreflectivenessこそが、言語教育における学習者自律のために、重要な要素なのである。

3.2 省察の有り方

表1の「到達目標」にも記載されている通り、またPISAのキー・コンペテンシーからも読みとることができるように、振り返ること（省察）は、教師の成長にとって不可欠であり、教師教育における省察的実践の重要性が議論されるようになって久しい。

教師を「省察的実践家 (The Reflective Practitioner)」と捉えたのはShön⁴⁾であり、教師は自分の行為を省察し、その場の問題を解決していくべきだと主張した。そして、教師の省察を、「行為中の省察 (reflection in action)」、「行為後の省察 (reflection on action)」、「今後の行為への省察 (reflection for action)」の3つに分類した。また、Korthagen⁵⁾も省察により自身の学び方についての理解も深まると述べ、教師の成長における学びと省察（振り返り）の過程は5局面から成るスパイラルであるとした (ALACTモデル)。ALACTモデルのスパイラルになっている5局面

とは、①行為 (Action)、②行為の振り返り (Looking back on the action)、③自身の行為に対する本質的な諸相への気づき (Awareness of essential aspects)、④行為の選択肢の拡大 (Creating alternative methods of action)、⑤その選択肢の試み (Trial) (その試みが更なる行為となる) である。

しかしながら、Walsh & Mann⁶⁾は、「省察的实践は、個人で行うものとして捉えられており、協働が重視されていない」と指摘している。そこで、以下、筆者が担当している「英語科教育法Ⅰ&Ⅱ」の中で実践している協働による省察、ピア・インタラクションを考察する。

4 「英語科教育法Ⅰ&Ⅱ」において、履修生が実践している省察

筆者はM大学で29年間「英語科教育法」を担当してきており、授業内で、学生の模擬授業を実施している。この授業では、学生が模擬授業を行う際、模擬授業についての模擬授業者自身による評価、クラスメートによる評価、教員(筆者)による評価を行っている。具体的な手順・手段は以下の通りである。

<マイクロティーチングの一部を利用>

- ①模擬授業用の指導過程及び教授スキルの選定——模擬授業は、「英語科教育法Ⅰ」では一人で、「英語科教育法Ⅱ」では二人一組で、15分～20分行う。前者は中学校の学習内容を、後者は高等学校の内容を扱う。(2020年度前期の模擬授業は対面でなく、オンライン上で実施した。)
- ②学習指導案の作成
- ③模擬授業実施と録画——模擬授業者以外の学生たちは、模擬授業中に中学生や高校生になりきって生徒役を演じるだけでなく、模擬授業中に次項に示す「授業観察ノート」⁷⁾に、観察者として授業の評価やコメントを記入しなければならない。
- ④模擬授業後、模擬授業者、生徒役の学生たち、教員による授業評価と講評及び討論
- ⑤省察——録画された映像や生徒役の学生たちによる「授業観察ノート」等に基づいて、模擬授業者は当初の指導計画や自己の教育実践を振り返って内省的な分析をし、振り返りに関するレポートを提出する。

このように、模擬授業者に対して行うフィードバックには、映像再生によるフィードバックやクラスメートや教員からの評価・討論によるフィードバックがあり、特に後者は、客観的な視点や第三者の視点が存在し、模擬授業者の独りよがりの思い込みを省察的に捉えることができる。模擬授業者は、自らの授業を、すでに終わってしまった客観的な事実として受け止め、それをクラスメートとの共通の教材とすることが求められている。

4. 1 省察の項目

「授業観察ノート」では、模擬授業中に生徒役の学生たちが、複数の視点を意識しながらより広い視点で授業を観察することを促されるような形式となっている。単に見聞きした状況をそのまま

記録するのではなく、それらの事実に対する観察者の評価を瞬時に下し、それを記述することが要求される。模擬授業者は、この「授業観察ノート」に書かれた観察者からのコメントを踏まえながら、自己の実践を省察的に考察することができる。

「授業観察ノート」の内容

生徒役の学生たちは次の16項目について5段階評価をする——1) 目標が明確かつ具体的であるか、2) 生徒の実態に合った目標であるか、3) 個々のステップが関連し合って統一ある全体を形作っているか、4) 生徒の興味・意欲を尊重しながらも計画的時間配分がなされているか、5) 予定していた事と偶発的な事とを上手く結びつけて、授業全体に役立っているか、6) 本時の目標が達成されてから授業を終えているか、7) 新教材導入の場面に無理がないか、8) 新しい学習事項を既習事項と対照・関連させて導入しているか、9) 説明が明確であるか、10) 発問が明確であるか、11) 発問が多様であるか、12) 発問のタイミングがよいか、13) 指示がはっきりしているか、14) 教師の発言に日本語が多すぎないか、15) 生徒ができるだけ英語を使うよう励まされているか、16) 授業全体を統制しているか。

4. 2 省察の結果と考察

各学期末に、履修生全員に、「授業観察ノートのコメントはどのように役立ちましたか。」という設問に関して回答を課した。ここでは、2015年～2017年にかけて筆者の「英語科教育法Ⅰ&Ⅱ」を履修していた学生63名の履修生と2020年度前期に「英語科教育法Ⅰ」を履修していた学生15名から得た回答を考察していく。（複数回答あり。）2020年度前期は、対面による模擬授業でなくオンラインによる模擬授業を実施したので、履修生には「模擬授業を振り返って」というタイトルで省察してもらった。以下に、通常の模擬授業後に学生から提出された自由記述と、2020年度前期のオンラインによる模擬授業後に提出された自由記述とを比較する。履修生の自由記述に対する分析方法としては、ソフトウェア KH Coder⁸⁾を用い、計量テキスト分析を行った。これは、できるだけ恣意性を排除して客観性を確保するためである。計量テキスト分析の結果は、回答における単語の出現回数が2回以上のものを利用して、共起ネットワークの図で以下に示す。共起ネットワーク内の円で示された単語は出現単語を指し、描画されている線は、強い共起関係を提示している。また、大きい円は、小さな円よりも、単語の出現頻度が高いことを表している。KH Coder上では、円内の単語をクリックすると、その単語が使われている文例が出てくる。表2、3は、上述のKH Coderを使って、履修学生の自由記述回答の語彙抽出リストをエクセルで作成したものである。

まず、「授業観察ノートのコメントはどのように役立ちましたか」という設問に対して、79件の自由記述回答があった⁹⁾。図2に示すように、最も多く使われていた単語は「自分(31回)」であり、次に「良い(16回)」、「気づく(11回)」、「コメント(8回)」、「今後(6回)」、「悪い(6回)」、「やる気(5回)」、「客観的(5回)」等と続く。以下に履修生からの回答例を示す。

- ・自分としては失敗な授業だったが、それでも良い点を探して書いてくれる人が沢山いて、とても

励みになった。

- 評価してくれた点には自信を持てたし、今度も続けていこうと思った。
- 皆が熱心に見てコメントしてくれたということが励みになったし、嬉しく思えた。更にやる気が出た。
- 自分の思っていたこと（主観的）と、他人からの視点（客観的）は違っていた。
- 自分ではほとんど気にしていなかったけど、生徒にすると重要視している（板書、ピリオドの有無等）ことがわかった。
- 生徒側の視点がわかってよかった（こちらから見えない部分。板書や声がどうであったか等）。
- 今後頑張ろうというモチベーションを上げることにつながったこと。
- 予想していたコメントが多数あり、授業を自分で客観的に見れてはいたことが確認できた。しかし、予想していなかったものも少なくなく、さまざまなものがあったので、いいフィードバックになったとともに、改めて集団の多様性を感じた。

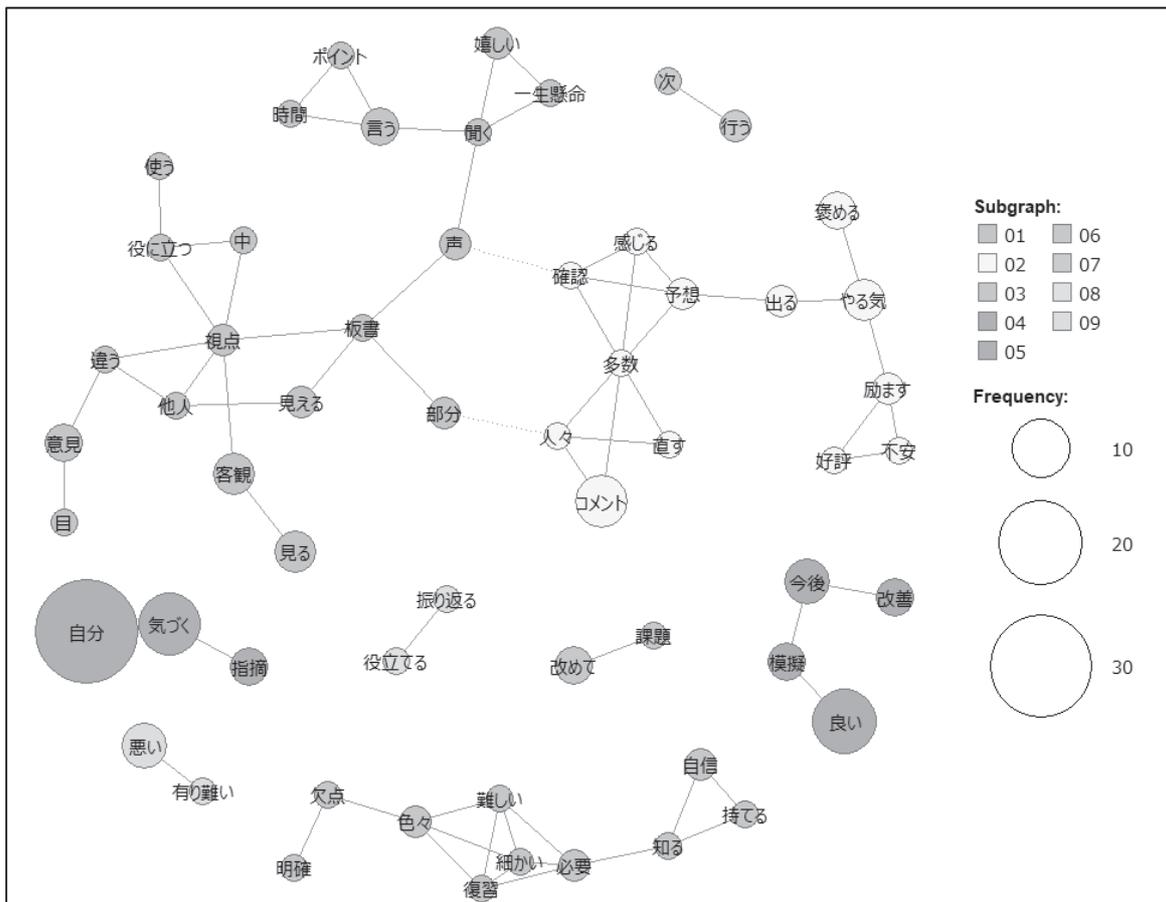


図2 共起ネットワーク：「授業観察ノートのコメントはどのように役立ちましたか」

- 表現したいことに細かく対応することができないと気づき改善すべきだと思いました。生徒の立場に立って考えることが少し足りなかったです。
- 自分では気づかなかった改善点を教えていただいたことで授業とは生徒と共に作っていくのだ、ということに改めて気づかされました。
- いいコメントが多くあったが、「和訳があった方が安心する」などの指摘があったので、次回は生徒側の見え方をもっと意識していきたい。
- 他の方からの観察ノートで、指示が明確・テキパキとしていて取り組みやすいといったコメントをいただいたので、その部分はさらに伸ばしていけるように工夫を加えていきたいと思う。
- 今回は自分の準備した授業をただ展開することだけで精一杯だったので、今後は生徒の目線に立って授業全体を作っていくことも目標にしていきたいと思う。
- 授業の振り返りをクラスメイトの評価とコメントを参考にしながら行なっていく。
- 今回の模擬授業では、自分の授業で足りていないものがなにかを考える機会になった。

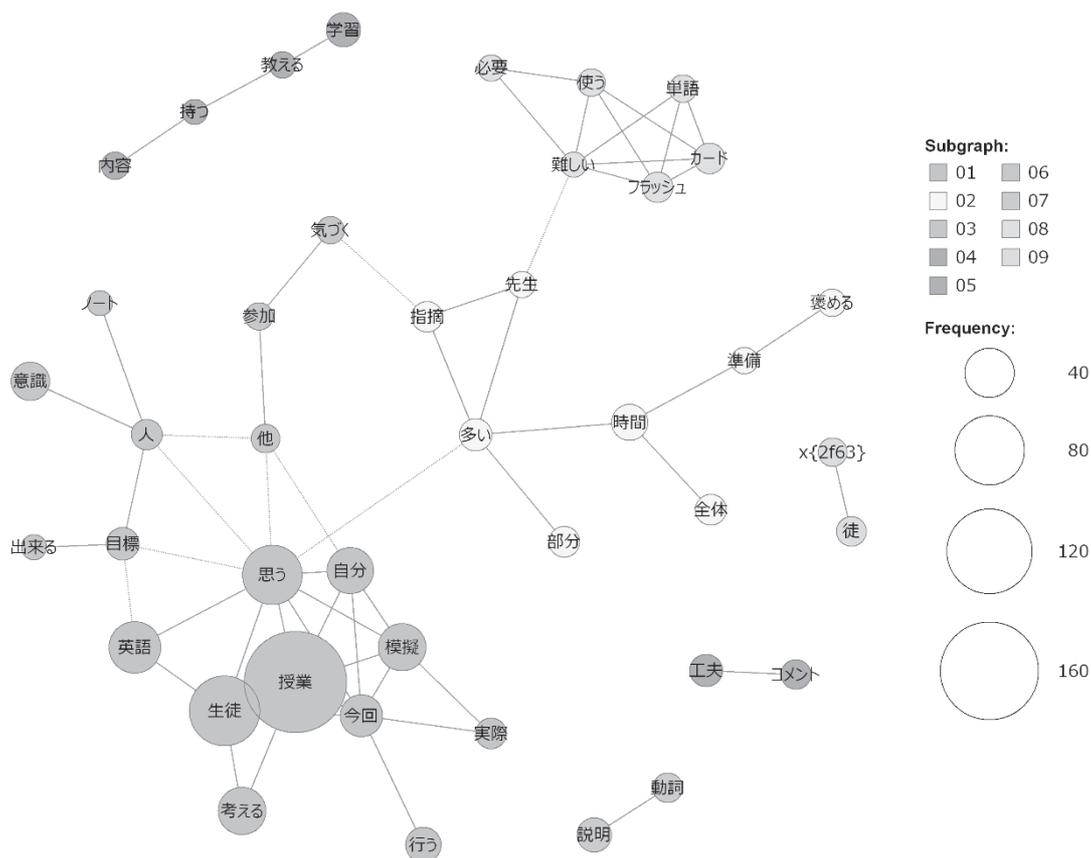


図3 共起ネットワーク：「模擬授業を振り返って」

通常の模擬授業後でもオンラインによる模擬授業後でも履修学生からの回答内容は類似していたが、多く使われていた単語において差異が見られた。通常の模擬授業では「自分」「良い」「気づく」「コメント」「今後」「悪い」「やる気」「客観的」が、オンラインによる模擬授業では「授業」「生徒」「英語」「模擬」「自分」「意識」「学習」「説明」「発音」「工夫」「評価」「目標」が多く使われていた単語であった。多く使われていた単語の差異は、模擬授業実施方法がオンラインか否かに起因しているのだ、とは現段階ではまだ言えない。

J-POSTLでは、省察する態度として、以下の3要素を強調している。

- ・教師に求められる授業力とその背景にある教授理論について考えること。
- ・教職課程を履修している仲間同士、および、履修生と指導教員との間で話し合いを持つこと。
- ・自分の授業力や知識に関して自己評価をすること。

これらの3要素は、履修学生によって程度の差こそあるが、模擬授業後に履修学生が省察していた内容と合致する。

履修生は、模擬授業後に記述式のコメントを書くことにより、具体的で詳細な授業分析ができ、模擬授業者にとっては、自らの経験から意味を抽出し次の教授活動に繋げるための契機となる。そして、それが、授業分析能力の向上に繋がるのではないだろうか。

省察は、根本的には、模擬授業者の思考及び情意に関する認知活動であるので、他者からのコメントによって生起するとは限らない。しかしながら、宮田¹⁰⁾は、「①授業者と同化する観点から、実践過程の文脈や解釈の一貫性を問い、次に批判的視点から問いかけ、②授業者が自身の授業を一貫した視点から整理して何らかの気づきを形成する必要がある」と主張している。実際、模擬授業者は、生徒役の学生が書いた「授業観察ノート」のコメントを元に多面的解釈をし、深い洞察を行い、省察に広がりをもたらしていた。ここに、協働による省察の重要性を見ることができる。

5 おわりに

模擬授業後のフィードバックの在り方には配慮する必要があるだろう。適切な指導や助言がなければ、模擬授業者の教授活動を修正することは難しい。金子¹¹⁾は、「マイクロティーチングを経験したのちに指導者から助言をもらった場合、学習指導案の書き方、言葉かけの技術、生徒の立場の尊重など、本質的で具体的な問題への認識が深まる」と言っている。

本稿では、模擬授業者による書き言葉のみに焦点を当て考察したが、授業中実際には、模擬授業直後に全員でディスカッションも行っている。今後はディスカッションによる話し言葉にも焦点を当て、話し言葉によるフィードバックが省察にどのように貢献し得るのかも探求していきたい。

注

- 1) Urzua, A., & Vasquez, C. 2008. Reflection and professional identity in teachers future-oriented discourse. *Teaching and Teacher Education*, 24, pp.1935-1946.

- 2) 岡秀夫編著. 2020. 『新・グローバル時代の英語教育』成美堂. 190頁.
- 3) OECD/PISA. 2003. *The Definition and Selection of Key Competencies Executive Summary*.
- 4) Schön, D. 1983. *The Reflective Practitioner*. New York: Basic Books.
- 5) Korthagen, F. 2001. *Linking practice with theory*. Lawrence Erlbaum Associates, Inc.
- 6) Walsh, S., & Mann, S. 2015. Doing reflective practice: A data-led forward. *ELT Journal*, 69, pp.351-361.
- 7) 実際の「授業観察ノート」を縮小したものが、遠藤雪枝. 2003. 「模擬授業と教育実習」『明治大学教職課程年報 No.26』50頁に掲載されている。
- 8) <https://khcoder.net/>より、ダウンロード
- 9) 遠藤雪枝. 2020. 「教職履修生の英語模擬授業後の省察」『明治大学教職課程年報 No.42』36－37頁からの掲載。
- 10) 宮田仁. 2003. 「Webベースのティーチング・ポートフォリオを活用した授業改善支援システムの開発と試行－教育実習前学生のマイクロティーチングを事例として－」『日本教育工学雑誌』日本教育工学会 27, 61－64頁.
- 11) 金子智栄子. 1999. 「マイクロティーチングにおける事前指導強化とフィードバック強化型の学生指導についての比較－幼稚園教員養成課程におけるマイクロティーチングの研究Ⅲ－」『日本教科教育学会誌』22(1), 11－17頁.